

瀬戸市立図書館の利活用計画 令和3年度～令和7年度(5ヶ年計画)

(経緯)

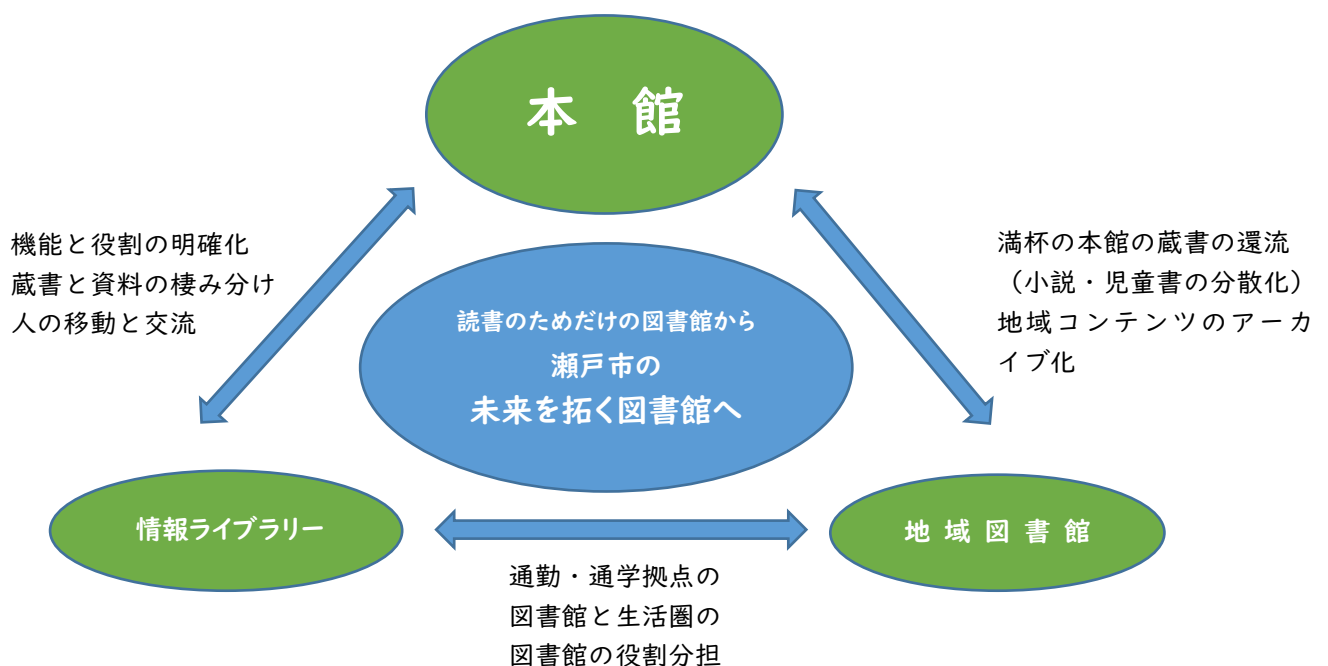
- 平成27年度 図書館整備基本構想の策定。
平成28年度 費用や適地の可能性を検証する中で、新たな建設を断念。
平成29年度 現在の施設を継続利用し、市民の意見を受け止め改善をしていくこととした。
平成30年度 図書館協議会を設置。
～令和元年度 図書館のあり方について議論。
パーティセと情報ライブラリー、地域図書館(7館)を含む図書館施設を活用しながら、いかに図書館サービスを行っていくか検討。
令和2年度 現在の施設を継続利用するに当たり、計画的な改修を行うため「図書館利活用計画」を策定。

今後の図書館のあり方

平成30年度に設置した図書館協議会では、現在の施設を継続利用するには、老朽化した施設の修繕と合わせて、利用しやすい施設とするための改修が必要であるが、約1,500㎡の床面積に多くの機能を求めることは不可能であり、どの機能を残し、どの機能をやめていくかを含め精査する必要があるとした。

また、今後の図書館の在り方について検討する中、ひとつの大きな中央館でのサービスではなく、今ある施設を有効活用し、本館、パーティセと情報ライブラリー及び地域図書館(7館)の特性を生かしながら連携させて、全体で図書館サービスを行う方向性を見出した。

本館、パーティセと情報ライブラリー及び地域図書館にそれぞれ機能分担し、本館をスリム化させた上で、改修する計画を作成したものが「瀬戸市立図書館の利活用計画」である。



各施設の機能分担

本館

本館は、以下のような特色を持った施設である。

北川民次の陶壁画により市民に愛され親しまれている芸術性高い建物である。陶壁画は、3面あり「知識の勝利」、「無知と英知」、「勉学」の原画を基に作成されていて、図書館にふさわしい題材で描かれている。この原画に込められた思いとともに図書館は歴史を重ねてきた。



創刊から揃えている「岩波新書」、
「講談社現代新書」等



『をはりの花 (陶器全集)』1932年刊行

本館の存在意義は、先人から受け継ぐ確かな知識、知の蓄積があること。図書館の開館は、終戦の年1945年、現図書館は1970年の竣工で、その当時に入手した資料を保存している。

これらの特色を活かしながら以下のような機能を持たせ、施設を整備していくこととする。

<ターゲット> 大人がゆっくり楽しめる
子どもも一緒に楽しめる
<蔵書構成> 幅広い知と親しみ教養を磨く

- ・本を探す図書館から本と出合う図書館へ（蔵書・配架調整）
- ・小説類・児童書・実用書偏重から教養本の重視へ
- ・滞在型の図書館へ（ゾーニングと調度・デザインの見直し）
- ・中長期的な選書計画により魅力ある蔵書構成に刷新
- ・Web展開やメディア発信など情報コンテンツ編集力を高める
- ・空間づくりやメディア展開、蔵書再編集の支援人材育成

情報ライブラリー

情報ライブラリーは、以下のような特色を持った施設である。

生涯学習の拠点であるパーティセと市民交流センターの3階に設置された情報センターとしての役割を果たすべく施設である。駅に隣接していて利便性が良い。



これらの特色を生かしながら以下のような機能を持たせ、蔵書構成、書架整備をしていくこととする。また、他機関との連携を強化していく。

<ターゲット> 中高生、大学生、社会人

<蔵書構成> キャリアとスキルを身に付ける

- ・キャリア教育と生涯学習に特化
- ・立地の特性によりサードプレイス機能の重視
- ・小説や児童書は置かず教養とスキルを磨く蔵書を重視
- ・課題解決型レファレンス機能の強化（カウンター業務見直し）
- ・「パーティセと」の機能との連携強化
 - 学びキャンパスせと（生涯学習）
 - 瀬戸まちの活動センター（市民活動）
 - 大学コンソーシアムせと（リカレント教育）

地域図書館

地域図書館は、学校図書館を一般開放した施設であり、以下のような特色を持つ。

平日は、学校図書館として、土曜日、日曜日及び祝日は地域図書館として午前 10 時から午後 3 時まで開館し、市立図書館の分館的機能を持たせ、地域に開放している。

児童書が揃っている。

地域の人が利用しやすい距離にある。



○開設している学校

品野台小学校、光陵中学校、西陵小学校、水野小学校、東山小学校、
幡山西小学校、にじの丘学園

これらの特色を生かしながら以下のような機能を持たせ、蔵書構成、書架整備をしていくこととする。

<ターゲット> 親子、高齢者、地域の人

<蔵書構成> 児童書、読み物中心（小説、大活字本等）、
地域資料（地域資源の掘り起こし）

- ・蔵書・配架を見直し魅力ある本棚を再編集
- ・居心地のよい空間づくりで地域サロン化へ
- ・サロンの3拍子もてなし／ふるまい／しつらいを担う人材育成
- ・親子での利用、子どもと高齢者など世代間交流の仕掛け
- ・各地域の特色に特化した蔵書の特徴を工夫した企画棚
- ・各地域ごとの郷土資料や語り部の言葉のアーカイブ化

本館リニューアル案

本館、パーティセと情報ライブラリー及び地域図書館でそれぞれ機能を分担し、誰も取り残さない図書館サービスを行っていく。機能分担することで、蔵書があふれ、窮屈になった本館に余裕を持たせ、空間的な魅力を増すことで、大人が1日滞在し、子どもも一緒に楽しめる図書館を目指した改修を行う。

●市民が交流し、サードプレイスとして魅力を感じる滞在型図書館を目指す。

従来の書籍を中心とした資料の貸出を重視する“静かな図書館”のイメージから、市民が交流し、言葉を交わし、大人から子どもまで、1日そこで楽しめる“居心地の良い図書館”へとイメージを刷新する。そのため調度・内装・照明を刷新し、魅力あふれる場をつくるための空間演出を重視した計画とする。

●空間機能を明確化したゾーニングと、蔵書の力を最大限引き出す配架計画。

くつろぎながら交流を楽しむ場、集中して読書や勉強をする場など、空間ごとの機能とルールを明確にする空間設計を行う。また、空間ごとの機能に応じて、NDC(図書館十進分類法)により整然と配架された“本を探す本棚”と、本の並びを編集的に工夫し、利用者の知的好奇心を触発する“本と出合う本棚”を使い分け、楽しみながら学べる、生涯学習の拠点として新しい知的空間を創出する。

●持続可能な地域づくりに向け、図書館本来のサービスの在り方を追求する。

SDGsに象徴される、世界的な持続可能な社会への変革の潮流の中で、10年後、50年後、100年後の瀬戸市および世界の未来について、自ら考え、話し合い、行動できる市民を育てる拠点としての図書館を目指す。そのため、図書館本来の在り方に立ち返り、図書館法で定義される、瀬戸市の市民の教養、調査研究、レクリエーション等に資する施設であることを原点として、空間づくりと同時に、選書からイベントまで、様々な図書館サービスの見直しをはかりながら、そのための仕組みづくりと人材育成を積極的に行う総合的なリニューアル計画をつくる。

●デジタル化やオンライン化など新しい図書館サービスを展開できる図書館へ。

DX(デジタルトランスフォーメーション=進化した情報技術を浸透させることで、人々の生活をより良いものへと変革させるという概念)に象徴される、情報技術の発展によりもたらせる多様な情報も図書館資料として扱い、さらにインターネットの普及による、市民間、さらには地域を超えたつながりを活かした、多様なオンラインサービスを提供できる図書館を目指す。そのためのシステムの強化や必要な人材の育成などを行う総合的なリニューアル計画をつくる。